
琥珀色の思い

堕天王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

琥珀色の思い

【NZマーク】

N1987D

【作者名】

墮天王

【あらすじ】

戦争で負傷した兵士と、兵士を助けた少女の物語。

冷たい雨が叩きつけていた。地は濡れ、ぬかるみ、足に食らいつけ、必死になつてはいる。それから逃げるよう必死に足を持ち上げ、一步一步友人を抱え、歩いていく。

「しつかりしろ！ もうすぐだ・・・もうすぐ、援軍と合流できる！」

本当にそうだろうか。多分、彼自身も期待はしていないに違いない。だが、そう言わなければならないのが現状だった。少しでも彼の気が休まるならば、しかし、友人のほうは彼よりもずっと冷静だった。

「隊長・・・もういいです」

もう右足なんか半ばからない。ただ引きずられ、運ばれているに過ぎない。視界を初めとする全ての感覚が曖昧な中、意識だけが研ぎ澄まされていく。絶望の淵にあることを知りつつも、友人は笑う。「何を言っている！ アニスがお前を待つていてるんだろうが！ 帰ろう、二人で帰るんだ！」

恋人の笑顔を思い浮かべることで、心が満ちていく。友人にとっては、もうそれで十分だった。

「隊長・・・生きて・・・ください」

頬を伝った一滴の涙。溢れ出でくる血液を吐き出し、冷たい雨の彼方に恋人の面影を浮かべたその瞬間、彼の意識は途切れ分散した。支えを失った体は、重力に引っ張られる。それを支えられなくなり、彼も友人と共に濡れた大地に叩きつけられた。

「ギリア・・・」

朽ちた友人の名前を呼ぶ。もう答えは返つてこない。彼に手を差し出す事もできず、体は泥の中に沈んでいく。意識が飲まれていく。雨の音も遠くなり、いつしか意識は曇つていった。

その時、丁度その現場に一人の少女の姿が。天使のように愛らし

い容姿の彼女は、男の未来を大きく変える存在となる。

戦争と共に生きた男と、平穏と共に生きた少女の出会い。男は、再び銃を握るのか、それとも 。

それは、どこかの世界の一つの物語。

ササイルムラー自治区の独立を発端として始まつた、ササイルムラー戦争。独立を阻止しようとするエヴィリスと、君主国から独立し共和国への道を目指すササイルムラーを援助するザムルカル共和国の、因縁の大戦争。その戦争の一大戦局の一つである、国境となつている川、ヘミン川を隔てての戦い。後に、ヘミン川の戦いと呼ばれるその戦いに、共和国側の第三十五番隊の隊長として、彼は参加していたのである。

強く差し込んでくる光に、顔をしかめて彼は目を覚ました。穏やかな鳥達の聲音と、優しい緑の匂いがしてくる。清々しい朝の空気は、彼の体を包み込み、急速に覚醒を促していった。

「ここは・・・？」

木で出来た屋根、木でできた壁。うすっぺらいベニヤ板ではなく、丸太を積み重ねて作られているようだ。いわゆるログハウスか。日が差し込んできていた窓には何もはまつておらず、ただ青いカーテンが揺れているだけである。

「あ、起きた」

少女の聲音。腰のホルダーから銃を出そうとしたが、その手は空を掴んだ。腰にはそもそもホルダーはなく、着ている服さえ、軍服から緑色の麻の服に変わっていた。そして、突然の動きは、深い眠りと刻まれた傷の痛みによつて蓄積されたダメージを本人に知らしめるだけだった。

「いててて・・・くそつ！」

「大丈夫。私、敵じゃない」

ある程度の距離を置いて、優しく微笑む少女。『敵ではない』、

そう言う奴に限つて　　というのもあるが、彼女の言葉は自然と信
用できた。彼女の笑顔が、それだけ無垢だったのだ。

「共和国の人間か？」

彼と同じく、少女は金髪に緑色の瞳。そして、白い肌。さらに同じ言葉と来れば、自ずと答えは出てくる。しかし、彼女の答えはあまりにも意外すぎた。

「ここはオーツルファーム。だから、大丈夫」
「オーツルファームだと？！　なんてこつたい、いつの間にか山越えていたのか」

オーツルファームは共和国の隣接国であるが、その国境のほとんどをセレル大山脈と呼ばれる山に隔たっていた。彼は、その山の麓で敵側の陣地に奇襲をかけようとして、逆に罠にはまつたのである。上へ上へと逃げていたので、いつのまにか国境を越えてしまつていたのだろう。

「ならなぜ君は、共和国の言葉を？」
「お父さん、共和国の人だつたから」

「そうか・・・」

とりあえず、彼女の言葉の通りなら周りに敵はいない。オーツルファームとは、仲がいいわけではないが、極端に悪いわけでもない。見つかつたとしても、強制送還程度である。彼としては、その方が正直楽。自分で旅費とかを見積もる必要がないからだ。

心の整理が、だんだんとついてくる。視野が広がつていいく中、彼は友人の存在を思い出した。近くに彼の姿はない。

「ギリア・・・俺のほかにもう一人いなかつたか？」

少女は、表情を曇らせた。それが全ての答え。助からないことは分かつてはいた。だから、彼もその真実を静かに受け止める。そんな彼の前に、少女は青い麻の布で包まれた物を置いた。ゴトという音がしたため、金物か何かが入っているようだ。

「そのギリアさん？　という人の持ち物です。お墓は、丘の上に作りました」

「・・・集めてくれたのか。それにお墓まで」

少女の心配りに、感動せずにはいられなかつた。麻の布の中身は、ギリアが使つてゐた銃とギリアの妻の写真、それと汚れたお守りと遺書と書かれた封筒だつた。

「ありがとう・・・これでアイツを故郷に連れて帰ることが出来る」悲しみが広がつていく。ギリアと出会つたのは、一年ほど前の話。部隊の再編成があつたときに、部下として配属されたのが彼だつた。年もほとんど変わらず、生まれも近かつたため、なにかと一緒にいることが多かつた。明るく、快活な男だつた。アニスとも婚約をしたばかりであつた。

多くの仲間を失い、多くの幸せが碎け散る様を見てきた。しかし、慣れるということはない。心なんてなくなつてしまえばいいのにそう思はずにはいられないほどだ。

「何か食べますか？」

「いや・・・今はいい。それよりも君の名前を聞かせてはくれないか？俺は、サファリスだ」

「チヨイチヨイ

「ん？」

発音が聞きにくかつたため、もう一度促す。少女は微笑み、ゆっくりと名前を言つ。

「チヨイ、チヨイ」

「チヨイチヨイ・・・こっち側の名前は変わつているな」話していると、意識が一瞬ぐらんだ。体調は、そこまでいい方ではないらしい。その様子に気付いたチヨイチヨイ。

「もう休んでください」

と、心配そうに告げてきた。元より、これ以上は起きてはいられなかつた。

「ああ・・・わりい、少し眠る」

「優しい夢を」

初めてそんなことを言われた。

「ああ・・・」

ギリアといった頃のこと思い出しながら、田を瞑る。いい夢が、見れそうな気がした。

川の流れに浮きを浮かせ、たゆたう姿を楽しむ。魚は、釣れたら釣れたで。日々、怒声響き渡る戦場にいるため、静かな時間は貴重なのだ。その間に割り込む輩が一匹。

「あ、隊長、こんな所にいたんですか」

「ん？ ギリアか。何か用か？」

一瞥さえしなかつたのに、ギリアは嬉しそうに笑った。

「もう俺の名前、覚えてくれたんですね」

「部下の名前ぐらい、最低限覚えるだろ?、普通」

「どうでしょうか・・・あんまり、名前で呼ばれた記憶がないですね」

ギリアは、苦笑していた。実際、彼のようごとに部下の名前を全部覚えている方が珍しい部類であった。

「で、何か用か？」

「あ、グレマストン曹長が、缶蹴りをするから隊長を呼んで来いと」「クソでも喰らえと言つておけ。俺は忙しい」「そこでギリアの興味の矛が、釣りへと移つた。

「釣れるんですか？」

「さあな。どうでもいい」

「・・・見ていていいですか？」

少し考え、言葉を紡ぐ。

「好きにじる」

言葉の余韻と共に、田が覚めた。また暖かな口差しが降り注いでいる。どうやら丸一日、寝ていたようだ。

「おはよ?」

部屋の隅で、縫い物をしていたチエイチエイが微笑む。彼女が持

つていていた服、それはサファリスの軍服だった。

「おはよう。もしかして、繕ってくれているのか？」

「うん、あつた方がいいと思いまして。完全に繕えるまで、もう少し待っていてください」

「本当に、何から何まで悪いな」

「困った時はお互い様です」

糸を噛み切り、サファリスの軍服を折り畳む。

「何か食べますか？」

「・・・そうだな。悪いが、頼めるか？」

まだ食事を食べたいという気分ではなかつたが、そろそろ何かを食べておかないと、体が持たない。

「うん、少し待つていて」

外に出て行くチエイチエイ。どうやらこの家の中には、台所なんていう便利なものはないらしい。周りが全て木である以上、家の中で火を焚くのは確かに危険である。

改めて部屋を見渡してみる。とても生活感のある部屋といえば聞こえはいいが、女の子が住むにしては少し汚い印象。折り重なった麻の布製品、洋服の作りかけだろうか？ しかしその横には、なぜか金槌と金属の板。ヤスリなんかも転がっている。他の場所には、竹の釣竿が五本ほど並んでおり、その横には様々な形のナタが三本転がっていた。まるで物置である。そんな中に、綺麗な白い布団が三セツト。もう意味が分からない。とどめが、目の前に並んでいる熊、鹿、猫、鷹のヌイグルミだ。

「・・・なんだこの部屋は」

統一感というものを、どこかに忘れてきたような部屋である。

さて、朝食。壁に立てかけてあつた机を置き、その上に並ぶじやがいものスープにサラダにパン。朝食らしいといえばらしいが、いささか量が多くすぎる。思わず、サファリスも呆気に取られていた。

「凄い量だな。いいのか？」

「うん。ほんと、村の人があれくれたものだから。まだまだ沢山ある

から、遠慮なくどうぞ」

村の人だと聞いて、驚くサファリス。どこの馬の骨かとも知れない輩に、ここまでする義理はない。価値観というものが、そもそも違うのかもしれない。

スープを口に含む。サファリスは、舌に残る痺れに『ん？』とうなる。

「これ、香辛料が入っているのか？」

「猪の肉の下味を使いました。辛いですか？」

「猪！ この細かい肉か。初めて食うな。やっぱり、香辛料を使わないで臭いのか？」

「私は、ちょっと苦手です。大人たちは、そのまま焼いて食べていますが・・・」

おぞましいとばかりに首を横に振る。こんな村で育つてはいるものの、割とデリカシーのようだ。

「香辛料とか、手に入るんだな」

共和国でも市場に行けば買えるが、それなりの値段はする。一般市民が、毎日食べられるようなものではない。

「行商の人と/or>が定期的に来るんです。麻の服やテーブルクロス、琥珀の工芸品とかを作つて交換してもらつているの」

これで部屋の謎が一つ解けた。この部屋は、どうやら寝室と仕事場を兼ねているらしい。そう考えれば色々と納得がいくが、もう少し整理した方がよいのでは？ というのが素直な感想だった。

「自分で作つているのか？」

「うん、村の人に教えてもらつたから」

「器用なものだな」

教えて出来るほど簡単なものではなかろう。元から才能があるのだろう。見た目はおつとりとした印象であるが、しつかりものもあるようだ。そこで、ふとサファリスは気になっていたことを思い出し、彼女に聞いてみる事にした。

「ところで、親はないのか？」

ここに来てから一回目の覚醒であるが、彼女の親の姿はまだお目にかかるつてい。見たところ、かなり田舎の村である。早朝に出来ていることも十分に考えられるが。しかし、彼女の答えは違つた。

「お父さんは、去年土砂崩れで亡くなりました」

平気な顔で、さらりと言つ。サファリスのほうが、逆に困つていた。

「そ、そうか・・・悪い事を聞いたな」

「よくある事ですから」

何も人が死ぬのは、戦争だけじゃない。天変地異に飢餓に病氣に。自然と共に生きているため、なによりも諦めが先行するかもしない。それとも彼女が、淡白なだけなのか？　いまいち掴めない。

「一人で暮らしているのか？」

「村の人たちと一緒にです」

村一つがまるまる家族のようなものなのだろう。都會暮らしのサファリスには、馴染みのないことであった。

母親の話は出てこない。そもそも母親はいないのかも知れない。根掘り葉掘り聞くのも変なため、別の話題を降ることに。

「ところで、ここに並んでいるヌイグルミは自作か？」

チエイチエイは、笑つて手を横に振る。

「そこまでは器用じやないです。行商の人から頂いたんです」

「なるほどな。道理で統一感がない」

サファリスは、熊のヌイグルミを指で突く。共和国では見たことのない姿だ。東の方では、強大な魔法の力で成り立つ国やら鉱山資源で成り立つ国がある。行つた事もない國のものとは、なんとも不思議な感じだつた。

食後、チエイチエイは仕事に出かけた。彼女曰く、働ける人はすべて働くのがルールらしい。士官学校を出るまで仕事なんてしたことがなかつたサファリスには、驚く事ばかりである。

三日が経つた。チエイチエイの看病もあつて、経過は順調。歩く

事ができるようにもなつた。村でのチョイチョイとの生活は、穏やかでとても暖かいものであり、戦争を日常としてきた彼にとっては、驚くほど新鮮だった。

三十年前、ザムルカルは革命が起り、王族は処刑された。まだ出来立ての法が敷かれ、平等な社会が訪れたが、世界で一番目となる共和国は他国の干渉戦争にさらされるはめとなる。王こそ絶対、神の僕しもべである、と主張する君主国や、神の下に法を敷き統治している宗教国家から見ると、共和国なんてものは市民に無駄な希望を与える癌でしかない。

共和国を守るために、共和国を広めていくために、軍人は武器を持ち戦う。サファリスは、革命に関わった軍人の息子でもあり、人々が平等に生活し、チャンスを活かせる世界を彼は誇りと思っている。そのため、士官学校も出て幹部候補生だった彼は、国の中核での勤務の話を蹴り、共和国の偉大さを伝えるため、最前線での戦いを希望した。

ひたすらに国の思想のために戦い続けた毎日。安らぎは、趣味である釣りの時間だけ。すべての時間を戦争に使い果たした彼が、戦争もない平和な村で過ごしたらどうなるだろうか？

その日サファリスは、チョイトイの肩を借り、友人 ギリアの墓を訪れた。村を一望できる共同墓地の端に、彼の墓はあった。立てられた木の墓標には、名前がない。そのためチョイトイにナイフを借り、名前を刻んだ。

「ギリア、正直アニスに会わせる顔がねえ。また引っぱたかれるんだろうな。まあ、それもこれも俺の判断ミスのせいだ。甘んじて受けけるさ」

後ろを振り返ると、チョイトイの姿はなかつた。気を利かせたのかもしれない。穏やかで清々しい風が慣れていく。木々が揺れる音が、耳に心地よい。澄み渡つた青い空には、まだらな雲がゆつたりと流れていた。

「・・・静かだな。硝煙の匂いと爆音、魔法の詠唱音と発動の際の

光・・・あの世界が、俺の住む世界だと思つていたんだが、ここにいるどどこか遠くの物語のように思えてくる。ギリア、俺はあの世界に帰るべきなのか？ それとも・・・

静かで穏やかで優しい村が、サファリスに与えた影響は大きかつた。軍の家系に生まれ、教えを絶対だと信じ、共和国のために戦い続けた日々。それが当たり前で、一生続けていく事になんら疑問を抱かなかつた。しかし、今はどうだらうか。ただ、確かな事が一つ。チエイチエイとの生活は、実に気に入つていて、それだけである。

「ギリア・・・また来るな。今度は、確かなる答えを持つて」

帰ろうと思ったが、チエイチエイが戻つてきていない。下手に探しに行つて迷子になつたら、目も当てらない。しかたなくその場に座つて彼女の帰りを待つことにした。しかし、ゆっくりと流れいく雲の姿眺めている内に、睡魔に襲われ彼はそのまま逆らう事もできずに眠りへと誘わいざなれてしまった。

草達の囁きが、サファリスに目覚めを促す。眠つていた事に驚き、慌てて体を起こす。途端に走る鈍痛が、傷が癒えていない事を教えてくれた。

少し離れた所に、チエイチエイの姿。じつと眼下の村を見下ろしている。思わず、サファリスは苦笑した。

「起こしてくれても良かつたんだぞ」

チエイチエイは、振り返るも笑顔を称えたまま何も言わない。しかし彼女が言わんとしている事は、サファリスにも伝わっていた。そのため、罰悪い顔をする。

「帰ろう」

サファリスは、自然と『帰ろう』と口にしていた。チエイチエイは、笑う。いつものように暖かく優しく。

その次の日、サファリスはチエイチエイから村長が会いたいとの旨を伝えられた。この村に来てから、五日目。村長との初コンタクトである。待ち合わせ場所は、村の中央にある広場のベンチだった。つまり、豪華な村長宅にお呼ばれされたと思っていた彼は、それ

を聞いて拍子抜けした。

チエイチエイにベンチまで案内してもらひ。チエイチエイは、その後仕事へと出かけた。

「しつかし・・・本当に穏やかな所だな」

遠くから金を打つ音や、機はたを織る音が聞こえてくる。皆、生きていくために必死に仕事をしているのだ。傷が癒えていくたびに、サファリスもなにかしなければという思いが募つてくる。だが、チエイチエイはサファリスに何一つさせてはくれなかつた。怪我人であり、客である彼にさせるわけにはいかない、といった所か。

空っぽの広場。皆仕事に出かけている。しばらく待つていると、砂利を踏みしめる音が聞こえてきた。サファリスのほうに、白髪で白ビゲのこれでもかつというぐらい村長面めんをした老人が歩いてきた。多分、この男が村長なのだろう。

サファリスは、立ち上がり深く頭を下げる。耳に大きなイヤリングをつけた老人は、笑つて手を振つていた。この村で、イヤリングは位くじの違いを表す、とチエイチエイが話していた事を思い出す。きっとこの老人のイヤリングが、この村で一番大きいのだろう。

「はじめまして。村長のムラスです」

柔和でそして優しい声音で話しかけてくる。

「はじめまして。サファリスです。この度は、命を救つていただきただけではなく、手厚い看病までしていただき、本当にどうお礼を言つたらよいか

「困つた時はお互たがい様じや。とりあえず座らんかね？ ワシは座るぞ」

と、勝手に座る。軍人であつた頃の癖でガチガチであつた彼の心も、それで少し和らぎ、サファリスもベンチに座つた。

「この村は穏やかじやろう？」

「・・・そうですね。本当に穏やか」

何の話が始まるかと思えば、初手は世間話である。とりあえず付き合つ。

「チヨイチヨイは、良い子じゃろう」「はい、とてもよくしてくれています」

「あの子にとって、『軍人』とは特別な意味があつてな。あの子か

村長は、嬉しそうに微笑んでいる。

「あの子にとって、『軍人』とは特別な意味があつてな。あの子か

ら、聞かれましたかな？」

「父親が亡くなつたお話ですか？」

「ああ、ソルベの話でない。非常に残念だつたがね。そうか、話してはおらぬか。あの子、浮いてあるじやろう？」

「浮いている、といふと？」

話が回りぐどい。老人とはこゝにあるものだと、サファリスは認識しているので落ち着いて対処する。

「ここの村とチヨイチヨイ、馴染んでいるように思えるか？」

馴染んではいるようには見える。ただ、彼女の髪や目の色は、決定的に違う。まだほんの少ししかこの村の住人を見ていないが、基本的に同一民族しかいない。彼女が浮いているといえば、確かに浮いているのかかもしれない。

「あの子は、ササイルムラー自治区から来たんじや」

サファリスは、驚きを隠せなかつた。

「詳しい事情はワシにも分からんが、八年前、彼女は一人の軍人に抱えられてこの村へやつてきたのじや。軍人は、彼女を送り届けるとそのまま亡くなつてしまつた。あの子は、純粹にこの村の子ではない。そして、この村に完全に馴染めてはおらん。ソルベがいてくれたら、あの子ももう少し変わっていたのだろうが、無責任にも土砂に流されおつて。あの子は、あれ以来頑なに心を開かずしておる」

「チヨイチヨイが？」

純粹無垢で、いつも笑っている彼女が心を開かずしておるといわれても、ピンとこない。そのことに、村長が触れる。

「疑問を感じるという事は、やはりサファリス殿には、外から来た人間には心を開いているのじやな」

表裏のない子のように思えたが、そうではないらしい。やはり人

間、一つや二つ癖は持っているものである。

「だから、サファリス殿よ、あの子をもうつてくれないか？」

「・・・も、ひ、・・・はあ！？ 私がですか！」

「そうすれば、あの子もこの村で穏やかに暮らせるというもののじやそらりと言つてのける村長。何の話かと思えば、これは勧誘である。村の人間は、自然と向き合つてているため、なかなか数が増えないのだろう。男手が増えるとあらば、大万歳。そんな話なのだ。

「いえ、私も向こうでやる事が」

と、言つてみたがとくにこれといった事は思いつかなかつた。ギリアの遺品を届けるぐらゝである。

「どうせ向こうに戻つても戦争をするだけじゃねつ。この村はいいぞ。メシも美味しいし、チエイチエイはいい子だしな。ちと色気がたりんが、そこは後のお楽しみという奴じや」

まさしくエロジジイ。笑い声さえ、癪に障る。こいついう村だ、こんな男が村長でも問題ないのだろう。むしろ、これぐらいオープンでないと務まらないのかもしれない。

「そうじや、もうすぐしたら祭りがある。とりあえずは、それを見てから考へると良かるひ」

「祭り・・・ですか？」

「この村には、魔法大国以前の遺跡があつてな、その遺跡をたてまつ奉り守つていくのも、また使命なのじや

「そんな古いものが、こんな所にあるとは」

魔法大国とは、およそ一千年前に栄えていた国で、その技術力は確実に現在の技術力を上回つていたといふ。それより以前というと、途方もない。

「こんな所だからこそ残つておつたのじやねつ。学者さん達の話に寄れば、オーツルファムの中では最古らしいな

よつこらせつと村長が立ち上がる。

「チエイチャイが教えてくれるはずさ。サファリス殿が知らない世界を

去つていく村長。残されたサファリスは、しばらくそのベンチから離れる事ができないでいた。

家に戻つてからも、サファリスは考え続けていた。チエイチエイがこの村に来た八年前といえば、ササイルムラーで大規模な虐殺が何度もあつた年である。税率の大幅な上昇に、反旗を翻したものたちが、町ごと屠られたと聞いている。彼女は多分、そのときの数少ない生き残りなのだろう。戦争を経験していなさそうな雰囲気であったが、実は違っていた。彼女はきっと、なんでも内に溜め込むタイプなのだろう。だから、父親が亡くなつても笑顔を作れるのだ。

「……この村で生きていくのも悪くはないと思つ。だが、違うんだ。何か違う。俺は、何かを忘れている」

もうずっと昔から、何かを失つていた。あつたはずなのだ、共和国の思想のためとかそんな大きな風呂敷ではなく、もっと根本的な思いが。

考え方しているうちに口が暮れ、チエイチエイが帰つてしまつた。その日にあつたことを心の中に押し込んで、彼女を微笑みで出迎える。

食後、金槌を片手に持ち、チエイチエイが聞いてきた。

「あの、作業していいですか？」

「ん？ 金槌で何をするんだ？」

チエイチエイが、何かの形を象つた鉄の板を見せてくれた。

「お祭りに使うクラウンを作らないといけないの」「自分で作るのか？」

「うん、その方が楽しいから」

本当に芸が多彩な子である。

「俺に構う必要はない」

「ごめんなさい」

チエイチエイは、金槌を振り下ろし始める。的確で、リズミカルな音が響く。実に慣れた手つきだ。

小さな肩、小さな体 年は聞いていなかつたが、まだ十代前半ではなかろうか。この子は、まだ幸せだと思う。戦争に巻き込まれていながらも、こうやって普通の生活が営めているのだから。戦災孤児が嘆き、売られたり、実験に使われたりする様を何度も見てきた。何度見ても、気持ちがいいものではなかつた。

小さな閃き そこに答えがあるような気がした。

チエイチエイの後姿を^{まぶた}瞼の裏に残しつつ、瞳を閉じる。また一日が過ぎていく。

翌朝、起きるとチエイチエイがいなかつた。仕事に行くにしては早すぎる時間。

「なんか用事でもあつたのか」

とりあえず外に出て、朝の太陽を浴びる。すると。

「あ、おはようございま～す！」

と、チエイチエイの声。下を見ると、チエイチエイが笑顔で手を振つていた。

「ああ、おはよう。ん？ ところで・・・」

チエイチエイは、一頭の馬と一緒に竹籠がくくりつけてあり、竿が数本刺してある。

「今日は、お仕事がお休みなので、サファリスさんを秘密の場所へ案内しようと思つていたんです」

「秘密の場所？ そりゃいい！ 連れて行つてくれ！」

気分転換には抜群だ。心躍らせて、チエイチエイの元へ走る。

「ところで、チエイチエイは馬も乗れるのか？」

「村で馬を乗れない人はいないですよ」

と、笑われてしまつた。サファリスの国では、車やバイクが少しであるが普及している。馬を扱えるのは、そのほとんどが軍人か貴族である。

「少し遠いですが・・・」

「俺の事は気にするな。怪我の具合もかなりいいしな」

「はい。でも、少しうつくり行きます。景色がとても綺麗なんですね」

「そうか、任せる」

チエイチエイが馬を繰り、サファリスはチエイチエイに抱きつく。チエイチエイに恥ずかしさとかは見受けられなかつたが、彼女に抱きつくサファリスはやつぱり恥ずかしかつた。そして、同時に思う。チエイチエイの小ささを。

村を離れ、森の中を疾走する。獸道程度の難しい道であるが、チエイチエイは上手く馬を繰つている。

「・・・ここら辺の木は大変貴重なものなんです」

「そうなのか?」

「フォロネの木と言われていて、私たちの村の代表的な工芸品である琥珀は、この木の樹液なんです」

「聞いた事がある。てことは、『は・・・『フォロネの大森林地帯』なのか』

「はい。私たちの村は、三千年以上もの昔からここを守つてきた一族で、現在も王様から特別な法が敷かれているんです」

サファリスも士官学校の地理で習つた覚えがあつた。深く暗い森は不気味に思えるが、この森はその暗さと静けさが逆にどこか神聖さを帯びている。ただの一度も、戦渦に焼かれた事のない、『神々の森』。そう謳うたわれるだけのことはある。

大森林地帯を抜ける。すると次は果てしなく広がる草原と、その下に広がる小さな美しい湖が姿を現した。サファリスは、思わず声をあげていた。

「これは・・・すごいなあ・・・!」

何も遮るものがない大空に、見渡す限りの草原。馬は、少し小高い丘を道沿いに走り続ける。冷たい風が頬を優しく撫でていく感触が、とても気持ちがよかつた。

「これから少し・・・難しい道を行きます」

「ん? おおう?...」

言つや否や、馬は道を逸れて丘をゆるやかなカーブを描きながら下り始めた。その先には、また森が見える。今度は獸道さえない。

チエイチエイは、迷わずそのまま森の中へと突っ込んだ。

さきほどの大森林地帯と比べると、なお木々の密度が高い。そのため、太陽の光もほとんど遮られておりとても暗かった。ひんやりとしたまるで洞窟の空気のような風が、体を包み込む。

それからが凄かった。チエイチエイは馬を巧みに繰り、道なき道を踏破していく。サファリスも振り落とされまいと必死にしがみつく。チエイチエイも真剣な面持ちで、額にはびつしりと汗をかいていた。

死ぬような思いが一十分ほど続いた後、チエイチエイは馬の速度を落とした。どこからともなく水の香りがしてきた。

「もうすぐです」

「そうか・・・とつとと、スマン、その、痛くなかつたか？」

慌ててチエイチエイの腰から離れる。思わずサファリスも頬を染めていた。

「大丈夫です。それに一緒にいるんだって・・・実感できたから・・・

・私は嬉しかつた・・・」

最後の方は、声が小さくなつて聞き取りにくかつた。しかし、サファリスは聞きなおさなかつた。彼も彼で恥ずかしさで一杯だつたからだ。

「森・・・抜けます。上を見上げていてください」「上・・・?」

チエイチエイに言われた通り、上を見上げる。馬が森を出たその時、サファリスの瞳にまばゆいばかりの太陽の光が降り注いできた。

「・・・・・・」

言葉を失っていた。ぽつかりと開いた空から、まるでオーロラのように降り注いでくる太陽の光。それはまるで神が降臨してくる時の光のようであつた。

静かな水のせせらぎが聞こえてくる。森から抜けた先は、森の中の大きな湖だつた。

「お父さんが偶然見つけたの。村の人たちも知らない場所」

「コイコイは馬から降り、馬を優しく労わる。サファリスも馬から降り、湖の方へと歩いていく。柔らかい地面に、足跡が残つていぐ。

「これは凄い……生まれてこの方、これほど美しいものを俺は見たことがない」

コイコイは、サファリスの反応に満足げだった。馬を木にくくり、竹籠から竿を取る。

「サファリスさん、どうぞ」

「ん？ おっ！ もしかして……釣りか！？」

サファリスは、少年のように喜んだ。まさか大好きな釣りを、ここで出来るとは思つていなかつたのだ。

「エサはどうするんだ？」

「自給自足ですよ。えいっ！」

と、石を蹴飛ばして、下に隠れていたミニマズをひつ捕まえる。

「なるほどな。よし……！」

とりあえず餌を集める。コイコイから小さな籠を借り、その中へ収納。その後は、座り心地のよさそうな石に座つて、竿を振る。ポチヤンという音が、静かに響き渡つた。コイコイも違う所で釣りを始めていた。

静かな時が流れ始める。聞こえてくるのは、水のせせらぎや鳥達の歌声ぐらい。サファリスが愛した時間が、今ここに最高の形としてあつた。

コイコイと共に魚が釣れるたびに喜び、話を弾ませた。最初は離れた場所でコイコイも気付けばすぐ隣で竿を差していた。楽しい時間だった。これほど楽しい時間はいつ以来だろ？ か。そう思えるほどに。

帰りは、サファリスが馬を繩り、コイコイが後ろへと座つた。コイコイは最初はかなり拒否していたが、サファリスに強く押されて馬の繩り手を明け渡した。

コイコイみたいに走らせたりはしない。ゆっくりとコイコイ

エイの案内に従つて馬を進めていく。背にくつついているチエイチエイの温もりを感じながら、サファリスは己の答えを導き出す。失っていたものは、やはりチエイチエイとあつた。今は、すべて残らず心に刻んでおきたい。ここにいられる時間は、もう僅かしかないのだから。

四日後、村の祭事が始まつた。フォロネの大森林地帯の中にある遺跡と村の中央の広場を、白い祭事用の衣装を身にまとつた村人達が往復していく。遺跡へ今年の成果を伝え、遺跡からの恵みを村へと持ち帰る。そういう趣旨らしい。それが終わると、広場に大きな篝火かがりびが灯る。その背丈で、来年を占うらしい。始めてみるサファリスにはさっぱり分からぬが、チエイチエイが『来年も豊作です』と言つていることから、そうなのだろう。

「チエイチエイ、よく似合つてゐるよ」

チエイチエイは驚き、そして頬を染めてはにかみ笑う。

「クラウンも上手に出来たな」

「そ、そうかな。あは、サファリスさんがそう言つてくれるなら、今まで一番の出来かも」

小さな琥珀の宝石が三つ埋め込まれたクラウンが、篝火の炎を照り返している。いつにもましてチエイチエイの姿は、美しかつた。

「チエイチエイ、ちょっとといいか?」

サファリスは、誰もいない所までチエイチエイを引っ張つてきた。並々ならぬ雰囲気に、緊張していいるチエイチエイ。少しでも和らぐようには、サファリスは微笑む。

「急に悪いな。でも、話しておかないといけない事があるんだ」

そう切り出し、サファリスはポケットから少し古ぼけたお守りを取り出して、チエイチエイに手渡した。

「今までのお守りには少ないが・・・こんなお守りだが、俺を十年以上も守つてくれた我が母親のお守りだ。もらつてほしい」

チエイチエイが何か言おうとする前に、サファリスはもう一度言

う。

「もうひでほしい。君に」

彼女の手を押し返し、そして告げる。

「ありがとう。俺は、国に帰る」

チエイチエイの表情が変わっていく様が、サファリスの心を抉つた。だが、もう止める事はできない。これが彼が導き出した答えなのだから。

「チエイチエイ、俺は・・・」

「いや」

震える声で一言。

「チエイチエイ・・・」

「いやっ！ どうして！？」

今まで見せた事がないチエイチエイの姿に戸惑うと同時に、受け止める。彼女の本当の姿もあるのだ。今までが 無理をしてきていただけなのだ。

「俺は、忘れていた決意を思い出した。だから、国に帰る」

チエイチエイは、持っていたお守りをサファリスに投げつけ、走り去る。

「チエイチエイ！」

追いかけようとも思つたが、追いかけてもどうじよつもない事に気づきやめる。暗闇に消えていくチエイチエイの姿を見送り、お守りを拾つて彼は荷物をまとめるためにチエイチエイの家へ戻つた。

チエイチエイは、結局戻つては来なかつた。探しに行かないのも薄情に思えたが、彼女を探しに行つてしまつたら、折角の決意が揺らいでしまいそうで怖かつた。

チエイチエイが繕つてくれた軍服を身に纏う。いつもしつくりときていた軍服も、しばらく着ていなide妙に着心地が悪い。ギリアの遺品を片手に、家を出る。まわりにチエイチエイの姿はない。仕方なく、家に向かつて深く頭を下げて、丘の上の共同墓地にあるギリアの墓を目指した。

「ギリア、お前の思いは必ずアニスに渡す。俺にできぬ」となんて
きつと大してないと思うが、俺はもう逃げない」

そもそもなぜ軍人になりたかったのか。それは子供の時に見た、
悲惨な同じ年の子供達の哀れな軀むくろを見たときに、『こんなことは間
違つてゐる』、そう思つたことが始まりだつた。

もうあんな子供達や、チエイチエイのように故郷を離れなければ
ならない子達を増やしたくはない。守つていきたい。そのためにも
戦争を終わらせなければならないのだ。そして 。

チエイチエイは教えてくれた。彼女は何でもできる、何でもこな
せる。色々なものを生み出す力を持つている。サファリストにはそれ
がない。壊す事は得意だが、生み出す事ができない。そして、知る。
壊す事よりも、生み出す事の方が何倍も難しいという事に。だから
。

「もうここには来られないかもしれないから、お前も一緒に來い。
一緒に帰ろう、俺達の故郷に。見せてやるからよ、俺が得た全てを」
ギリアの魂を背負い、村に背を向ける。その彼の前に、目を真つ
赤に泣き腫らしたチエイチエイがいた。驚きを隠せない彼に、チエ
イチエイは。

「ん
と、拳を突き出してきた。

もう一度彼女が言う事で、何かを渡そうとしている事が分かつた。
拳の下に手を差し出すと、チエイチエイがようやくその拳を開いた。
サファリストの手に落ちてきたのは、綺麗なやや赤みを帯びた琥珀
が埋め込まれたペンダントだった。サファリストは、それをしつかり
と握り締める。

「じゃ、これをもらつてくれ」

昨日捨てられたお守りを渡す。今度は素直に受け取つてくれた。
顔を上げずに、大事そうにお守りを胸に抱いている。

「元気でな」

チヨイチヨイの頭を軽くポンポンと叩き、横を通り過ぎ歩いていく。チエイチエイは何も言わず、静かに泣いていた。

それから半年が過ぎた。サファリスの姿は、ササイルムラー自治区の首都エレミスにあった。ヘミン川の戦いに敗れて以来、旗色はかなり悪かった。その結果が、首都目前までに攻め込まれているこの戦況だった。現在、エレミスにこもり必死の反抗戦が繰り広げられている。しかし補給線は一週間前に絶たれてしまった。本国からの援軍も足止めをくらっており、到着することができない。首都エレミスは、まるで地獄だった。

「・・・隊長、奴ら仕掛けてこなくなりましたね」
ずっと彼の部隊にいるグレマストンが、銃の手入れをしながら言つてくる。彼の言つとおり、ここ三日ほど敵は動いていない。嫌な緊張感だった。

「奴らもしかしたら・・・」

サファリスの軍人の感は、まさに的中した。部下の一人が、空を指差す。

「隊長！ あれ、まずくないっすかあ！？」

『あれ』と指差す先にあったものは、赤い光だった。それはぐんぐんこちらに近づいてくる。サファリスは、慌てて叫ぶ。

「メテオストライクか！ 全員、とにかく祈れ！！」

広域戦術魔法メテオストライク。彼らがどう頑張つても防ぐ事ができない代物だ。出来る事は、こっちに飛んでこないようになると祈るだけ。

「かあちゃん！ もう俺悪い事しないから勘弁してー！」

「母親かよ！ まあ、神よりもありてえかもな。おう、俺のマイハ二ー、守ってくれえ！」

「なにがマイハ二ーだ！ 恋人とかいねえだろうが、ボケカス！」

「お前ら、黙つて祈れ！！」

部下どものつまらない話を粉碎する。迫りくる破壊の槌つち。その進

路が少しづつずれていくのが、サファリスにも分かった。

「祈り方、やめ！ 衝撃に備えろ！」

凄まじい爆音を上げつつ、隕石が町に降り注ぐ。まるで地震が起
こつたような揺れが、彼らを襲つた。

衝撃が収まる。サファリスの予想通り、全ての隕石は別の場所へ
と落ちた。メテオストライクの悪い所は、滅茶苦茶な命中精度にあ
る。破壊力はあるが、決定的なものがない。

「奴ら攻めてきますかね？」

「数が少ない。これは脅しだ。さすがに負け戦の匂いがしてきたな」
敵は、サファリスがいう通り攻めてこなかつた。さらに三日ほど
この緊張感が続いた後、サファリスたちの部隊にある一報が届いた。
「終結です！ 各部隊は速やかにエレミスから撤退してください！
繰り返します！ 講和条約が締結されました！ 各部隊はエレミ
スから速やかに撤退してください！」

「講和・・・条約だと？」

部下の一人が、不思議そうに呟いた。

「終わつたんだよ、共和国の負けだ。撤収しろ

「しろ？ 隊長はどうするんですか？」

「俺か？」

サファリスは、部下に向かつた不敵な笑みを浮かべた。

「俺はすることがあるんだよ！」

サファリスは、持つていた武器を全て投げ捨て、代わりに琥珀の
ペンダントを手に走り出した。壊すのではなく、生み出すために
。

Hピローグ

二年後

少しずつ復興の兆しを見せ始めた、ササイルムラー共和国の首都
エレミス。サファリスは、荷馬車に揺られつつそんな町を眺めてい

た。彼は、軍人を辞め、復興作業に身を費やしていた。今は、戦争で行き場を失つた子供達の世話を主に見てている。今日は、買出した。馬車を繰る男は、サファリスの活動に賛同してくれている有志である。

買出しは、色々な店を回る。大抵は、サファリスの活動に賛同してくれる所で、物を安く売ってくれる。時折、サファリスに面倒ごとを押し付けてくる事もあるが、それも仕方がない。しつかり受けて、報酬をもらう。ただ壊すだけだった軍人の仕事よりも、確かに充実感がそこにはあった。

最初の店にたどり着く。ここで買うのは、雑貨だ。大人数の子供達の世話を見ているため、色々なものが壊れる。壊れにくく、なおかつ扱いやすいものがあればベストである。その雑貨屋で、サファリスは普段見慣れない商品が置いてある事に気づいた。

「店長、ここはいつから装飾品とか置くようになつたんだ？」
ネックレスやイヤリングに腕輪。数は少ないが、出来のいいものが並んでいた。

「ああ、ここ最近、女の子が共同農場にやつてきてね、その子がこまごまとそういうのを作るんだよ。あんまりに綺麗だつたから、ウチにも置かせてもらつていてる、てわけさ」

「へえー・・・装飾品ね。名前は？」

「確か、シャー・・・ああ、シャリーだよ。シャリー＝フロウ」

一瞬期待はしたが、名前は違つた。まさか彼女がこの町に来ているのではないかと驚いたが、世の中やう上手には出来ていない。

「一つ買つていかなかね？」

「いや、ウチのガキどもに見つかつたらひるさいからな。遠慮しくよ」

「お前の所も大変だな。今日も色々まけといてやるぜ」

「すまないな、いつも」

必要なものを見繕つて、店長に告げていく。そうしていると、外から少女の声が響いてきた。

「すいませ～ん」

小さな声だが、しつかりと届いてくる。店長の顔が、いきなり綻んだ。

「噂をすれば。よお、シャリーちゃん。今日は、何がいるんだい？」
噂の彼女、登場である。その姿を一応見ておこうと振り返ったその時、サファリスの目は点となつた。向こうも呆けた顔でこちらを見ている。

「・・・シャリー？ それが本当の名前なのか

「サファリス・・・さん・・・！」

突然走り寄り、抱きついてくるシャリーといふ名の少女。少し大人びてはいるがそれはどこからどうみても・・・チョイチョイだった。

泣きじゃくる彼女に戸惑いつつ、とりあえず頭を撫でるサファリス。その髪の感触が、なんとも懐かしかつた。

「知り合いだつたのか？」

と、不思議そうにしている店長に、サファリスは告げた。

「俺の大切な人だ」

琥珀のネックレスがチョイチョイの涙を跳ね返し、美しく煌いた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1987d/>

琥珀色の思い

2010年10月8日14時18分発行